

## 青年期の自己肯定感と過去の食事場面との関連

本研究では、子ども時代の食事場面における家族との共食・交流が、青年期の自己に対する肯定的な感情といったところに影響を与えるとの報告に注目した。しかし先行研究では、過去と現在を包括した食事場면을測定していたため、明確に子ども時代の食事場面と青年期のころとの関連が示されたとは言えない。そこで、先行研究にて食体験の重要な時期とされた児童期の食事場面に焦点を当て、青年期の自己に対する肯定的な感情、すなわち自己肯定感に及ぼす影響について検討するため、青年期の大学生・大学院生を対象に質問紙調査を実施した。

調査の結果、児童期に朝食を家族で食べる頻度が少なかった者は、青年期の自己肯定感が有意に低いことが明らかとなった。また、児童期の食事場面において、互いの悩みを話し合い、楽しいことを共有するような家族の関わりが食卓に居心地のよい雰囲気を作り出し、そのような居心地のよい雰囲気の食卓を経験していることが、青年期の自己肯定感へプラスの影響を及ぼすことが明らかとなった。そして児童期の食事場面においては共食頻度といった量的要因よりも、家族間の相互交流や子どもが食卓の雰囲気をどのように体験していたのかといった質的要因が重要な要因として、青年期の自己肯定感に影響を及ぼす可能性が示唆された。